

日本語と韓国語の動詞の意味論的対照研究

— 「あける」「ひらく」と「열다 [jo:lda]」を中心に—

金 慶 恵

1. はじめに

日本語の他動詞に「あける」と「ひらく」がある。これに対応する韓国語は「열다 [jo:lda]」があげられる。例えば次のような例である。

- (1) ドアを あける。
- (2) ドアを ひらく。
- (3) 문을 열다. (ドアを)

munil jo:lda

- (4) 本を あける。
- (5) 本を ひらく。
- (6)^x 책을 열다. (本を)¹⁾

tj'egil jo:lda

以上の例文に現れている「あける」「ひらく」「열다 [jo:lda]」は意味用法において(1)(2)(3)のように共通領域を持つところもあり、(4)(5)(6)のように相違をみせているところもある。当然、各々を支配している意義素が異なるのは言うまでもない。本稿では日本語と韓国語の対照研究を通してそれぞれの動詞の意義素の抽出を試みることにする。考察を進める前に、考察対象にする動詞について触れておかなければならない。まず、「あける」には、「開」「空」「明」の字を当てるべき用法がある。本稿では、「開」の字を当てるべき「あける」の他動詞用法に限ることにする。他動詞の「あける」には「空」の字を当てるべき用法がある。

- (7) コップを あける。
- (8) 席を あける。

これは「何かにふさがれている場所をからっぽにする」(柴田編1979) という意味特徴が認められる。この意味は「ドアを あける」などの意味とは異なるものであり、対応する韓国語も異なって現れるので本稿では考察外にする。

「ひらく」には、(9)、(10)のような自動詞用法があるが、「開」の字を当てるべき「あける」には自動詞用法がないので次回の課題としたい。

- (9) ドアが ひらく。

(10) つぼみが ひらく。

2. 「あける」と「ひらく」

「あける」と「ひらく」は動作の主体による差は認められない。人間や人間に準ずるものを主体とする。それは、「あける」「ひらく」ともに手か手に準ずるものなどを用いての行為を要求する動詞だからである。ここでは、主にどのような形状の対象物を取り、行為を起こす目的は何か、また、動作の次元ではどのような違いがあるのかなどを調べることにする。

2.1. 対象物としての資格

- (11) ドアを あける。(=1)
- (12) ドアを ひらく。(=2)
- (13) カーテンを あける。
- (14) カーテンを ひらく。
- (15) ふたを あける。
- (16) ふたを ひらく。
- (17) 封筒を あける。
- (18) 封筒を ひらく。

以上の例では「あける」「ひらく」ともに用いることができるが、その内容は必ずしも等しくはない。(11)の「ドア」はスライド式のドアでもちょうつがい式のドアでもあり得る。しかし、「ひらく」を用いた(12)ではちょうつがい式のドアが予想される。(19)のような具体的な表現が現れると明確になる。

(19) 風が ドアを ひらく。

の場合、「風」という媒介体がひらく「ドア」は、スライド式であると予想するのは無理があり、自然に立体的動作を起こす対象を思い浮かべる。(13)(14)の「カーテン」は、上下、左右運動をする対象として平面内に収まる移動のように思えるが、移動で対象物が畳まれたり、丸められたりするという、形状に立対的な変化が起こる。その上可逆な移動である。「カーテン」の場合は、日本語を母国語とするインフォーマントからもまちまちな答えが帰ってくる。その点、定着した表現として扱うには少々の問題があるが、移動において、他の平面内に収まる対象物とは違って立体的であると認められるので「ひらく」で表現できると思う。「ふた」の場合は、いろいろな形状があり得る。(15)の「あける」の場合は、ふたの一部分が本体に固定されているもの、ネジ

回し式になっているもの、被せるだけのものなどどれでも構わない。しかし「ひらく」を用いた(16)の場合は、一部分が固定されていて、ある部分を軸として角度を持った運動を成すことが条件となる。(以下必要な場合には「角運動」という用語を用いることにする)²⁾。「封筒」を開封する動作は二通りが考えられる。(17)の動作は糊付けの部分を剥がしてもいいし、はさみで端を切ってもいい。つまり、動作を起こすにおいて可逆性は問題にしない。しかし(18)の「ひらく」は、はさみなどを用いて対象物が元の形状への不可逆な場合は不適格になる。「ひらく」動作は必ず可逆行為の場合だけ成立するからである。このように「あける」動作は対象がどのような形をしているかは問題にしていない。その対象をどんな形であれ移動させることに動作の焦点がある。しかし、「ひらく」は立体的に動き、対象が元の形状に戻ることが可能な可逆な場合に限って適格になる。このように対象物の形状や運動の条件によって「あける」と「ひらく」が選別的に選択される。「ひらく」は、遮っていた仕切りとしての対象物を移動させるということでは「あける」と共通しているが、特徴的現象としては、対象物が立体的運動を要求し、可逆性を有する動作でなければならないということの指摘ができる。

2.2. 行為の焦点

行為を行うときに、「あける」ことのできるものと、できないものとは何が違うのだろうか。

- (20) ドアを あける。(=1)
- (21) ドアを ひらく。(=2)
- (22) 封筒を あける。(=15)
- (23) 封筒を ひらく。(=16)
- (24)[×] 掌を あける。
- (25) 掌を ひらく。
- (26)[×] 傘を あける。
- (27) 傘を ひらく。

「ドア」「封筒」の場合は、内側と外側の対立があることが認められる。つまり、内側の存在が認められ、対象物によって外側との隔たりが生じているということである。それを「あける」動作で対象物を動かして内側にある中身が外側と接触することになる。中身は具体物の場合もあり得るし、空気だけの空っぽの場合もあり得る。「あける」動作は、対象となるものを動かして二つの空間を一空間化することがまず

一段階の目的であると言えよう。それに比べて「掌」「傘」は内側と外側との対立は認められないし、また空間を二つに仕切っていたわけでもないので「あける」を用いては不適格になる。「ひらく」は「ドア」「封筒」が対象の場合は立体的な運動を成し角度を拡大していく。しかし、立体的な運動で対象を動かすことでどんな行為の目的が果たせるのだろうか。「掌」「傘」から推測できるのは、「ひらく」動作で対象物が使用可能の状態になるということである。

(28) 本を あける。(=5)

(29) 本を ひらく。(=6)

(28)(29)は同じ動作を表す表現である。しかし、しいて言うならば「ひらく」動作は「あける」に比べて使用可能の状態にするという印象が強い。何かの活動をはじめるという意味で「ひらく」が用いられる場合をみてもこのことは立証される。

(30) 先生が口を あける。

(31) 先生が最初に口を ひらく。

(30)の例文は、単なる物理的行為を表すに止まる表現であるが、(31)の「ひらく」行為は、主体の「先生」が話し始めるという人間の言語活動の開始を表す。「あける」とは違って「ひらく」はその行為が行われるによって何らかの活動が可能になることを示唆することができる。また、「ひらく」は、抽象的な行為を表す場合がある。

(32)[×]幕府を江戸に あける。

(33) 幕府を江戸に ひらく。

(34)[×]ジャングルに道を あける。(何かを退けて空間を作るという文脈ではない)

(35) ジャングルに道を ひらく。

(36)[×]店を あける。(抽象的に新しく店を出す行為として不適格である)

(37) 店を ひらく。

(33)(35)(37)は具体的な特定の動作ではない。例えば、「ドア」などが対象になる場合は「あける」動作も「ひらく」動作もともに一つの場面で成立する動作であるのでその特定の動作を想定することが可能である。しかし(33)(35)(37)の例は、複数の動作の積み重ねで始めて成立する行為であり特定の動作を想定することはできない。「幕府」「道」「店」を「ひらく」行為は、人間の活動する新しい場所をつくりだすことで共通している。(36)の場合は、店の開店時刻、または店のドアを具体的に動かす行為を表すもので、「ひらく」のように人間の活動する場所を作るという意味にはならない。(37)の「ひらく」と同様の抽象的意味を表す表現としては「あける」を用いた(36)の例文は非文になる。このように「ひらく」は、対象物の移動で角度を拡大して使用可能の状態にする

他、「幕府」「道」のように無の状態から有への生成、開拓を表す場合と、「店」「口」が対象になる場合のように何かの活動が始まるという始発行為を表すことができる。

2.3. 動作の次元

以上の分析からも「ひらく」は立体的な移動を要求するものが対象になる場合が多いという特徴が見出せた。森田1989 (p36) にも、「『ひらく』は立体的な状態にしばしば用いられる」という指摘がある。確かに「ひらく」は三次元的な角運動を表すことが多い。

(38) 引き出しを あける。

(39)[×] 引き出しを ひらく。

(40) かぎを あける。

(41)[×] かぎを ひらく。

(39)と(41)が非文になるのは動作が二次元的な平面内に収まり、対象物の形状に変化が起こらないからである。

(42)[×] 脚を あける。

(43) 脚を ひらく。

(44)[×] コンパスを あける。

(45) コンパスを ひらく。

(43)と(45)は、立体的な動作とは言えないが適格である。それは「脚」「コンパス」がある固定された一部分を軸として、接していた部分が離れて角度を拡大し、新しい空間を作るという変化を経るからである。閉じた状態では一本の線であるが、「ひらく」ことによって面の状態へと移行する。「ドア」「ふた」「封筒」も同様に「ひらく」ことによって二次元から三次元への移行が生じる。つまり「あける」は、行為の焦点が対象物の移動にあり、対象物を動かすことで生じる次元は問題外である。しかし「ひらく」は、「次元の拡大」という特徴が現れる。

3. 「열다 [jo:lɔda]

「あける」と「ひらく」に対応する韓国語は「열다」である。以後の例文からも分かることだが、「열다」という行為は「あける」と「ひらく」の両方に対応している。しかし「本」が対象になる場合は「펴다 [p'jɔɔda]」が対応する。

(46) 문을 열다. (ドアを) (=3)

munil jo:lɔda

(47) 뚜껑을 열다. (ふたを)

t'uk'ɔŋil jo:lda

(48) 가게를 열다. (店を)

kageril jo:lda

(49)^x 책을 열다. (本を) (=6)

tj'ɛgil jo:lda

(50) 책을 펴다. (本を)

tj'ɛgil p'jo:lda

「열다」の対象についてまず見よう。「ドア」はスライド式でもちょうつがい式でも構わない。「ふた」も形状による制約はない。「店」の場合は、具体的な動作として「ドア」を動かすことと開店時刻を表す場合、抽象的な行為として新しく店を出す行為があるが具体的な指摘がないかぎりどちらの意味にも取れる。いずれの場合も「열다」で表すことができる。しかし、「本」の場合は「열다」を用いての表現はできない。それは、密着状態に畳んである対象物に働きかける行為になるからである。(50)の「펴다」は、畳んである状態の対象物に働きかけて隠れていた面を表面に出す行為を表す意味がある。「열다」は、(46)(47)(48)のように実在する対象物に直接働きかけて動かす場合と、(49)のように抽象的な行為を表す場合がある。直接対象物に働きかける場合は空間的観念での行為になるが、抽象的な行為としては時間的観念に基づいての行為である。それぞれの場合について考えることにする。

3.1. 仕切りの移動を表す「열다 [jo:lda]」

(51) 창문을 열다. (窓を)

tj'agmunil jo:lda

(52) 상자를 열다. (箱を)

sangzaril jo:lda

(51)(52)の例文でも分かるように、「열다」は対象物の形状による制約はない。「窓」の場合は窓を移動させて二つに区切られていた空間を一空間化する行為である。「箱」は箱にふたなどがありそれを動かす行為である。形状はどの形でもかまわない。「열다」という動作は、対象物によって遮断されていた空間をその対象物を移動させることで二空間を一空間化することを表す。しかし、その条件を満たすにも係らず次のような文には不適格である。

(53)^x 눈을 열다. (眼を)

(54)^x 풀로 붙인 봉투를 열다. (糊付けの封筒を)

p'ullo putʃin poŋturil jo:lɔda

(53)のように、遮断している状態といっても対象物の両面が密着状態にあり対象物を移動させても空間的な開通の状態にならない場合、または(54)のように、対象物全体が固定されていて移動させると元の状態に還元できない不可逆な場合は非文になる。

「열다」という行為は、動作を行うに当たって空間的開通と対象物が元の状態に還元できる可逆性を条件とする。「眼」が対象になる場合は、「열다」ではなく、「뜨다 [tt'uda]」という動詞が対応する。「뜨다」という動詞は、両方面に間隔を広げることを意味する。前面密着している「眼」に対しては広げるという表現で「あける」「ひらく」同様の意味を表している。また、「糊付けの封筒」のように対象がくっついている場合は、「뜨다 [tt'utt'a]」という動詞を用いる。「뜨다」は、くっついている対象物の剝離行為を表すものである。このような剝離動作の場合は次のような表現にも現れる。

(55)^x 강통따개로 강통을 열다. (缶切りで缶を)

k'aŋt'oŋt'agero k'aŋt'oŋil jo:lɔda

この場合は、「떠다 [tt'ada]」という動詞で表現する。「떠다」は「뜯다」と同様の意味を表すが、対象物全体の剝離行為を表す単数行為であり、「뜯다」は、部分的に剝離する複数の動作を想定することができる。「열다」は以上のように、対象物の前面が密着していない、また移動が行われた後も元の状態への可逆性を有する場合、その対象物に直接働きかけて動かすことによって遮断されていた空間を一空間化することを表す。

3.2. 人間活動の始発を表す「열다 [jo:lɔda]」

「열다」は、具体的動作としてではなく抽象的な行為として何かを始めることを表す場合がある。

(56) 학회를 열다. (学会を)

hakhweril jo:lɔda

(57) 새 가게를 열다. (新しい店を)

se kageril jo:lɔda

(56)(57)は今まで実行していなかった事柄を新しく、もしくは改めて行うことを表す文である。(56)は(48)に「新しく」という内容を具体的に表す要素が加わっていて、「シャッター」や「ドア」を直接動かすことではなく「商売を始める」という開始の意味を表す。このように「열다」は、人が集まって何かの活動を行ったり始める行為を表す。

しかし、何かを行ったり始めるといっても次のような無から有への生成、開拓の意味を表す文には不適合である。

(58)^x 길을 열다. (道を)³⁾

kiril jo:lda

(59)^x 나라를 열다. (国を)

nararil jo:lda

「열다」は、(58)(59)のようになかった「道」を、存在しなかった「国」を新しく、無の状態から有の状態に生成する、または開拓することを表す文脈には不適合である。つまり「열다」は、人間が何かの活動を始めるという「開始」を表すことはできても「生成、開拓する」という意味領域は持たないということである。

「열다」は、具体的動作と抽象的動作に分けて考えることができる。具体的動作を起こす場合の対象物の条件は、前面不密着で、可逆性を有することである。その条件を充たしている対象物によって二分化されていた空間を一空間化することを表す。これが抽象的行為になると、人間活動の開始を表すことになるのである。抽象化した行為を表す「열다」は、具体的動作から発展しているが、日本語の「ひらく」のような、全くない無の状態からの生成、開拓を表すまでの広がりを持たない。

4. 対象物の平面化、一直線化の行為を表す「펴다 [p'jɔda]

日本語の「あける」「ひらく」が「本」を対象にする場合は、韓国語は「펴다」が対応するというをすでに述べた。この「펴다」はどのような意味を表す動詞なのか。「펴다」行為は対象物の形状による制約がある。つまり、対象物が畳まれていたり、丸まったり、窪んだり、凹んだり、しわが寄っていたりする場合に用いることができる。

(60) 책을 펴다. (本を) (=50)

tʃ'egil p'jɔda

(61) 우산을 펴다. (傘を)

usanil p'jɔda

(62) 부채를 펴다. (扇子を)

putʃ'eril p'jɔda

「本」「傘」「扇子」は外からの働きかけがない限り形状は全面密着で、畳まれている状態にある。それを「펴다」動作を行うことで対象物をひろげることになる。平の状態になるわけではないが平面化に接近しようとする行為として認められる。手紙の

ようなものが対象になると、畳まれた状態でいた中身が外側に表出することを表すことになる場合もある。

(63) 편지를 펴다. (手紙を)

p'jɔndʒiril p'jɔda

また、次のような場合もある。

(64) 손바닥을 펴다. (掌を)

sonp'adagiil p'jɔda

(65) 팔을 펴다. (腕を)

p'aril p'jɔda

(66) 구겨진 종이를 펴다. (もみくちゃの紙を)

kugjɔdʒin tʃɔŋiril p'jɔda

(67) 바지주름을 펴다. (ズボンのしわを)

padʒidʒurimil p'jɔda

(68) 어깨를 펴다. (肩を)

ok'eril p'jɔda

(64)は手首から指先までピンと伸びていなくて少しでも曲がっている状態であればよい。(65)もひじに角度がついていればよい。(66)(67)はしわ等が寄っている場合であり、(68)は身体をうずくまっていたりなどのために姿勢が曲がっている場合である。それぞれの場合において、平らな平面状態に、または一直線の状態にする行為を「펴다」が表すのである。つまり、「펴다」は畳まれていたり、非平面状態にあるさまざまな形状の対象物を「平面化」「一直線化」する行為を表す動詞である。それで「本」が対象になると、対象物の性質上、畳まれていて中身が外側に表出していない状態にあるためか、「펴다」を用いて表現する。韓国人の言語意識では、「本」は「펴다」の対象として扱われている。

5. 対照考察

実在する対象物に直接働きかける場合、「あける」と「ひらく」は空間を遮断している対象物を動かして一空間化する動作を表す共通領域を持つ。しかし、抽象化した行為では独特の意義があり、対応しないところが現れる。これに比べて「열다」には、具体的行為と抽象的の行為がある。また、「ひらく」動作に対応するのは「열다」だけではなく、部分的な対応として「펴다」という動詞が現れる。「펴다」は「열다」とは全く違う意味を表しているので、本稿での対照考察は、おもに「あける」「ひらく」

と「열다」について述べることにする。「펴다」は「ひらく」と部分的に対応するところだけ対照しながら見ていく。

以上のように複雑な対照をみせているそれぞれの動詞について、以下、具体的に対照考察を進める。

5.1. 対象物の条件

「あける」と「ひらく」、「열다」が対象物に直接働きかける場合、それぞれの行為の対象物には制約がある。「あける」と「열다」は対象物がある空間を二つに仕切っていて所謂「内側」と「外側」の対立性をおびていなければならない。この場合、対象物の形状は問わない。しかし、「ひらく」は対象物の一部分が固定されていることと、可逆性が条件になる。

(69) 窓を あける。

(70) 窓を ひらく。

(71) 창문을 열다. (窓を) (=51)

tj'agmunil jo:lda

(69)(70)は窓の形状に係わらず空間を仕切っていた「窓」を動かして内側と外側に区別されていた空間を一空間化する行為であるが、(70)は必ず「窓」の形が観音開きであることが想定できる。このことは「ひらく」が具体的動作を起こす場合は必ず立体的、かつ可逆性を要する行為であることから生じる制約である。

(72)^x かさを あける. (=26)

(73) かさを ひらく. (=27)

(74)^x 우산을 열다. (かさを)

usanil jo:lda

このように「ひらく」の対象物は立体的な移動を要するものでなければならない。このように「あける」「열다」は、内側と外側の対立を持つもの、「ひらく」は立体的な動きを成すものが対象物の条件になる。この「ひらく」に対応するのは「열다」ではなく「펴다」である。

(75) 우산을 펴다. (かさを) (=61)

usanil pjoda

「펴다」は立体的な角運動を要する対象物という制約を有するのではなく、対象物の状態が畳まれていたり、窪んだり、凹んだり、しわが寄っていたり、角がついていたりなどと平の状態に反するものが対象になり、それぞれの対象物に対して平らな状

態に近づけるように作用する動作を表すので、「ひらく」の本義とは異なる。しかし、「本」「かさ」「扇子」などが対象になる場合は、韓国語では「펴다」を「ひらく」同様の意味として用いているのである。

5.2. 行為の焦点

あるものを対象にして動作を起こす場合、「あける」は、対象がどのような形状であれ空間を二つに仕切っていた対象をある方法を使って除いたり、退かしたり、または移動させて一空間化を図ることに動作の目的があるので、対象物の可逆性は問わない。

(76) ドアを あける。 (=1)

(77) ドアを ひらく。 (=2)

(78) 缶を あける。

(79) 缶を ひらく。

(78)は缶のふたを全部とって取らなくても構わないが、(79)は缶のふたの一部分が缶本体に固定されていることを想定した上での行為と認めることができる。これは(77)でも同じことが言える。また、「ひらく」ははさみなどを用いて封じてある封筒を「ひらく」ことはできない。それは「ひらく」対象となるものは可逆性を要するからである。

(80) 糊付けの封筒を あける。

(81) 糊付けの封筒を ひらく。

(82)[×] 糊付けの封筒を はさみで ひらく。

「ひらく」は(81)のように封筒のふたがもとの状態に還元できることが想定される場合に適格であり、(82)のように具体的動作が表示され、それが不可逆な行為であることが確認される場合は不適格になる。「열다」との対照ではっきりする。

(83)[×] 플로 붙인 봉투를 열다. (糊付けの封筒を) (=54)

p'ullo putʃ'in poŋt'uril jo:lda

(83)は手段となるものが何であれ「糊付けの封筒」の持つ密着性、それに行為を行ったあと元の形状に戻ることができるという可逆性に反することで非文となる。「密着性」のある対象物は「열다」で表すことができない。

(84)[×] 눈을 열다. (眼を) (=53)

nunil jo:lda

(84)が非文になるのは対象物の全面が密着したまま動くことになるからである。この

ような行為は「열다」では表すことができない。「열다」は、対象物の移動で二分化していた空間が一空間化することを表すから、対象物の移動で空間的に開通することと、対象物の完全な可逆性が必須条件となる。

(85)[×] **강릉따개로 강릉을 열다.** (缶切りで缶を) (=55)

k'ant'opt'agero k'ant'ogil jo:lda

(85)は、対象物がもとの状態に還元できないという不可逆なところに問題があり、それで不適格になる。このような「可逆性」が行為の条件として深く係わっていながらそれぞれの語彙の目指す目的は何だろうか。

(86) **ドアを あける.** (=1)

(87) **ドアを ひらく.** (=2)

(88) **문을 열다.** (ドアを) (=3)

munil jo:lda

(89) **本を あける.** (=4)

(90) **本を ひらく.** (=5)

(91)[×] **책을 열다.** (本を) (=49)

tj'egil p'joda

(92) **책을 펴다.** (本を) (=50)

tj'egil p'joda

ここで問題になるのは行為自体ではなく、行為を起こす目的である。「あける」と「열다」は空間を遮断していた仕切りを動かして一空間化する行為を試みていると言えよう。しかし、「ひらく」は立体的な運動を通しての対象物の次元の拡大に焦点をおいた行為である。(89)~(92)の例文のような畳まれている状態の対象物に対して、「あける」は対象物の隠れていた面を新しい空間に出し一空間化するという行為であり、「ひらく」は固定されている部分を軸として立体的に角運動を成し次元を拡大する行為である。「열다」は対象物の形状に制約はないが、全面密着状態の対象の場合は不適格になるので、この場合は対象物をひろげることで平の状態に接近させる行為を表す「펴다」を用いて表現する。このように同じ文脈に用いられてもそれぞれの動作の目的は異なる。

以上は実在する対象物に直接働きかける場合についての考察である。では、抽象的な行為を表す「ひらく」と「열다」はどのように対応しているだろうか。

5.3. 抽象的働き

行為の結果が抽象的な意味になる場合は「あける」は不適格である。「あける」は具体的動作以外に抽象化した意味領域は持たない。しかし、「ひらく」は抽象的行為を表すことがある。「열다」も抽象的用法がある。

(93)^x 會議を あける。

(94) 會議を ひらく。

(95) 회의를 열다. (會議を)

hweiril jo:lda

(96)^x 渋谷に 店を あける。

(97) 渋谷に 店を ひらく。

(98) 일본에 가게를 열다. (日本に 店を)

ilbone kageril jo:lda

(94)(95)は、人間が集まって何か改めて、または新しく活動を始めることを表す文脈である。(97)(98)も「渋谷」「日本」という場所に「店」を開店して所謂人間の活動の場所を設けることを表す。「ひらく」と「열다」はこのように人間の活動の場所を設けることを表す共通部分がある。「あける」はこのような抽象的な表現には不適格である。また、「ひらく」は上のような意味だけではなく、無から有をつくり出すという「生成」、「開拓」を表す場合がある。

(99)^x 幕府を江戸に あける。 (=32)

(100) 幕府を江戸に ひらく。 (=33)

(101)^x 나라를 열다. (国を) (=59)

nararil jo:lda

(102)^x 道を あける。

(103) 道を ひらく。

(104)^x 길을 열다. (道) (=58)

kiril jo:lda

「ひらく」が持つ抽象的働きとは、人間の活動する場を設けるという大きなカテゴリの中に、(94)(97)のように開始を表す部分と(100)(103)のように無から有への生成、または開拓を表す部分が含まれている。これは、具体的動作を起こす場合の「次元の拡大」という観点から出発していると考えられるもので、それが派生力を持ち抽象化していると言えよう。「열다」が「ひらく」の抽象的用法に対応しているのは、(95)(98)のように人間が活動を開始する場を設けるところだけで、(101)(104)が非文になったように生成や開

拓の部分は含まない。このような用法は比喩的な表現の広がりとも関連がありそうである。

以上の対照分析の結果から分かる対応関係は、「あける」と「ひらく」が具体的動作を起こし対象物の移動で空間の一空間化を図る行為として認められる場合は、「**헤다**」がそれに対応している。しかし、「ひらく」行為の対象物が密着状態で、かつ畳まれていたりする場合は「**펴다**」が対応する。また、「ひらく」が人間活動の場を設けるという抽象的行為を表す場合は「**열다**」が対応している。しかし、「ひらく」が無から有へと生成、開拓するという行為を表す場合は、「**열다**」ではなく他の動詞で表現する。

6. まとめ

以上の分析をもとにして「あける」「ひらく」「**열다**」の意義素を抽出して以下のよう

「あける」：遮断の状態にある内側と外側の一空間化を表す。

「ひらく」：可逆を条件とした次元の拡大を表す。

「**열다** [jo:lɔda]」：可逆を条件として、閉鎖状態からの開通を表す。

注1) 「本」が対象になる場合は、韓国語では「**열다** [jo:lɔda]」ではなく、「**펴다** [p'jɔda]」という形態素が「あける」「ひらく」に対応する。韓国人の言語意識では「本」という対象物に対しての行為の焦点は、ひろげることとあり、隠れていた面を表面に出すことを意味するようである。

注2) 「ひらく」の角度の拡大としての移動行為について森田(1989)では、「角運動」という表現を用いている。本稿でも角度を持った「ひらく」行為に対してはその用語を用いることにする。

注3) 「**열다**」が「道」を対象にする場合は、日本語の「空」の字を当てるべき用法の「あける」と同じ意味を表す。何か道を通るにおいて妨害になると判断した場合、その対象物に対して働きかけて「空」の状態にすることを表す意味になる。しかし無かった道を新しく生成、開拓するという意味で「**열다**」を用いることはない。

／参考文献／

柴田編1987『ことばの意味2』平凡社

松村明編(1988)『大辞林』三省堂

森田良行1989『基礎日本語辞典』角川書店

李熙昇1982『国語大辞典』民衆書林

言語経歴

1958年	韓国京畿道生まれ
1～12才	韓国ソウル
12～15才	日本東京
15～28才	韓国ソウル
28～現在	日本東京

(Kim Kyoung Hye・東京都立大学大学院生)